

入選

おじいちゃんと私の笑顔の配達

香川県 金山小学校 4年 大谷 紗也

「こんにちは。広報を持ってきました。」

月末になると、私とおじいちゃんは坂出市の広報誌を配りにいきます。おじいちゃんは今年、ちいさの班長になりました。班長の仕事の一つに、坂出市の広報誌を配ることがあります。自分の班の家庭10けんに、一部ずつ配ります。

私のおじいちゃんは病気になり、心ぞうを悪くしました。また、せぼねをこっせつして、長い時間歩くときにはつえをついて歩いています。だから、おじいちゃんが困っているときには、なるべく手助けをするように心がけています。

「いっしょに配ってくれるか。」

というおじいちゃんの問いかけに、すぐに返事をしました。おじいちゃんの家は山のふもとにあるので、同じ班の人の家に行くには坂道や山の中の細い道を通らないといけません。おじいちゃんがとちゅうで転んだり、しんどくなったりしては大変だと思ったからです。

私が走って一けん目の家のポストに向かい、広報誌を入れようとしたとき、

「ポストに入れんと、チャイムを鳴らして。」

と言われました。毎月自分の家に届く広報誌は、知らない間にポストの中に入っているの、ふしぎに思いました。

チャイムを鳴らして、家の人が出てくると、

「元気なんな。毎日暑いな。」などと、少し話をして広報誌をわたします。おじいちゃんに理由を聞くと、近所で一人ぐらしの人が亡くなってしばらくだれにも気づかれなかったことがあったそうです。おじいちゃんの班も70代や80代のお年寄りの一人ぐらしの家庭が多く、なるべく話をして元気な様子をたしかめたいという気持ちから、声をかけようと思ったそうです。

私は小さいころ、母の仕事の帰りがおそかったので、幼稚園から帰ると祖父母の家ですごしていました。夕方になると、おじいちゃんといっしょに、家の近所をさんぼするのが毎日の楽しみでした。さんぼをしていると、近所のおじいちゃんやおばあちゃんが、

「何才になったん。大きくなったなあ。」

と声をかけてくれました。母の帰りを待つさみしい気持ちが、少しふき飛ぶ気がしました。

私が広報誌を渡すと、おじいさんやおばあさんは笑顔で受け取ってくれます。昔みたいに

「大きくなったな。」

と声をかけられると、おじいさんたちも笑顔に、私の心もあたたかくなります。おじいちゃんがポストに入れなかった理由がわかった気がしました。私が届けていたのは、広報誌だけでなく、笑顔と元気もいっしょに配達していたのです。

広報誌の配達もあと二回。私はこれからもおじいちゃんと、近所に住む人たちを元気にするために、笑顔の配達を続けたいです。

「こんにちは。暑いですね。元気ですか。」